

どっこを拭くか「観察」して考える

過去に4回も「世界一清潔な空港」と評価された羽田空港には「カリスマ清掃員」と呼ばれる人がいる。日本空港テクノ株式会社勤める新津春子さんだ。多忙な日々を過ごすなか、「日々の家の掃除は、薄手のタオルで拭くだけ」という新津さんに、清掃・掃除に対する思い、そしてプロならではの「拭く」コツを教えていただいた。

新津春子さん

日本空港テクノ株式会社
環境管理部 環境マイスター

Haruko Niitsu

1970年、中国・瀋陽生まれ。17歳で来日し、家計を助けるために高校へ通いながら清掃の仕事に従事。日本空港テクノ株式会社入社後の1997年、全国ビルクリーニング技能競技会で最年少優勝(当時)。羽田空港が2013年、2014年、2016年、2017年に「世界一清潔な空港」に選出された際の功労者の一人として活躍。「清掃はやさしさ」「掃除は「ついで」にやりなさい」など著書多数。

羽田空港第一旅客ターミナルの出発ロビーでモップを手にする新津春子さん

「世界一清潔な空港」にプロとして貢献

東京都大田区にある東京国際空港、通称「羽田空港」は、国内48空港、世界18カ国・地域の30都市33空港（2016年冬ダイヤ）と結ばれ、年間8000万人（注1）が利用する日本の玄関口である。1時間当たりの発着回数は80回に上る。およそ45秒ごとに離発着が行なわれている計算になる。

平日の昼下がりに羽田空港の第一旅客ターミナルを歩く。人々が行き交っているが、利用者が多いと感じるのは、出発ロビーのある2階だ。荷物を預ける人、保安検査場に向かう人、ソファやイスに座って出発を待つ人、手土産を買う人——各々異なる目的をもって動き、旅立っていく。

フロアを見回すがゴミは一つも落ちていない。トイレもピカピカに磨き上げられている。それらもろは、羽田空港は「清潔な空港」として知られている。イギリスのSKYTRAX社（注2）の国際空港評価「The World's Cleanest Airports」部門で、2013年、2014年、2016年、2017年と4回にわたり世界第1位に選ばれた。

この調査は「お忍び」で行なわれるため、勤務する人たちの日ごの努力が欠かせない。

「世界一清潔な空港」に選出された功労者の一人と称されるのが新津春子さんだ。清掃、設備管理、工事、植栽、花店などの空港内サービスを提供する日本空港テクノ株式会社で働く新津さんは、総勢700人も清掃員のスキルの底上げやモチベーションアップに日々取り組んでいる。

「やさしさがいい」心に響いた上司の指摘

新津さんは中国・瀋陽しんやうに生まれた。中国残留日本人孤児の父親が「日本に住もう」と決断し、1987年（昭和62）に一家五人で移住。家計を助けるために、「日本語がほとんど話せなくてもできるから」（新津さん）という理由で清掃の仕事に携わる。

その後、職業能力開発センターで清掃に関する知識や技術を体系的に学び、1995年（平成7）の春、日本空港テクノに就職する。「生活のために始めた仕事だけれど、技能を身につけて『清掃のプロ』として生きていこう」と心に決めた新津さんは腕を磨き、1997年（平成9）10月、全国ビルク

リーニング技能競技会で優勝する。しかし、全国大会に先立ち2カ月前に行なわれた東京予選では二位だった。いったい何があったのか。「予選で私の演技を見ていた上司に『あなたの演技にはやさしさがいい』と指摘されたのです」

最初は何を言っているのかわからなくて反発すらした新津さん。気づいたのは、「清掃の道具にも命がある」と言われてからだ。 「ハツとしたのです。私は清掃の型ややり方、所要時間にこだわるあまり、道具を雑に扱っていたのです。きつと表情もこわばっていたでしょう。審査員はお客さまと同じ目線ですから、私の演技を見てよい気分にならなかったはずですよ」

予選から本大会までの2カ月、新津さんは上司を観察して、道具の扱い方から立ち居振る舞い、笑顔までまねして猛練習した。そして当時の最年少記録となる27歳で優勝を果たす。

「けれど、一位になれたのはまねをして練習したからです。ほんとうの『やさしさ』、モノを大事にする『心』が自分のものになったのは、それからずっと先のことです」上司を見習って優勝してから、新津さんには人やモノをじっくり観察する癖がついた。「ちょこちょこ小さな歩幅でし

か歩けない方がいますね。私たちにはなんてことない段差でも、そういう方はつまずいて転ぶ危険があります。仕事中に気づいてそのままにしておいて、仮にお年寄りが転んでケガをしたら絶対に後悔すると思うんです」

じつと見て自分にできることを考える。たとえ自らの仕事の範疇じゃなくても改善のために声をあげる。これは新津さん流の「やさしさ」であり、そこには「心」がある。

日々の拭き掃除を最小限にするコツ

新津さんは清掃と掃除を使い分けている。仕事は「清掃」、そして家事として行なうのは「掃除」だ。清掃のプロである新津さんは、自宅でも隅々まで掃除すると思われがちだが、実はそうではない。



フェイスタオルを用いた壁の拭き方を実演する新津さん

（注1）年間8000万人

国土交通省東京航空局が2017年3月9日に発表した「管内空港の利用概況集計表（2016年確定値）」による。

（注2）SKYTRAX 社

1989年に設立したイギリス拠点の航空サービスリサーチ会社。世界の空港や航空会社の評価を行なう。



自宅の拭き掃除などについて語る新津さん

「家ではよく触るところ、そして動線を、水で湿らせた薄手のタオルでサツと拭くだけ。くまなく掃除するのは大掃除のときだけですよ」

家のなかにはドアノブなど必ず触るところがある。そこは欠かさず拭く。そして自分や家族が頻繁に歩く廊下や階段も拭く。そうした場所は「じつと観察して」見つけるのだ。

「どういう風に動くのか、どこによく座るのかを把握すれば、毎日の拭き掃除は最小限で済みますからね」

一時期、テーブルの下にごはん粒が落ちていたことがあったそう

だ。「食事の夫をじつと見てみると、体はテーブルから離れたまま首だけ伸ばして食べていたのです。『あなた、もっとテーブルに体を寄せ

て食べて!』とお願いました」と新津さんは言うが、「それに首も疲れるでしょ?」と付け加えたのは夫に対するやさしさだろう。

モノを大事にする「心」は今も健在。拭き終えたテーブルなどに「よかつたね、きれいになったね!」とよく話しかける。「心を込めればテーブルだつて長く使えますよね? 人にもモノにも気持ちが大それたことです」と新津さんは笑った。

八つ折りタオルは 万能の拭く道具

そんな新津さんの日々の掃除は、フェイスタオルを6〜8枚使うだけ。朝起きたらタオルを水でゆすいで絞って拭く。途中で洗わずに、すべてを終えてから洗って干すのだ。洗剤は使わない。タオルがしっとり濡れた状態で拭く「湿り拭き」^(注3)ならば汚れがとれるからだ。乾拭きも必要ない。

フェイスタオルを八つ折りで使う方法は、拭く道具として利点が多いと新津さんは言う。

「まずタオルを横に広げて2回折って、さらに縦に1回折ります。その大きさを、ちょうど人間の手のサイズなんです。指先ではなく手のひらで拭くので力も入りやすいから楽に拭き掃除ができる。

しかも八つ折りのためで両面使えば合計16面拭けます。雑巾と比べて洗う・絞る回数が減りますし、タオルならば洗って干すのも簡単で、しかも乾きやすい。メリットばかりでしょ?」

壁を拭くときはタオルを伸ばして右手で拭く。左手はタオルの下を持ち、肩幅に足を開いて体ごと左右に動かすと疲れにくい(P29写真)。また、目で確認しづらい高いところは、伸ばしたタオルで手を包んで拭けば、ビスや突起で手を傷つける危険性はぐっと低くなる。

たった1枚のフェイスタオルに、これほど多様な使い方があるとは思ってもよらなかった。

拭くのはみんなが 健康でいるため

新津さんにとって「拭く」とはどういう意味をもつのか。

「例えば、私がキッチンをしつかり拭かなかつたために家族が食中毒になつたら、『私のせいだ』と後悔するでしょう。ほこりを拭いたり、

吸い取つたりしなければ、家族がぜんそくなどのアレルギー性疾患になるかもしれない。不衛生にしている健康への悪い影響が絶対にあります。だから、こまめに拭くのです」

みんなが常に健康でいるために拭く——。見落としがちだが、これがいちばん重要なことかもしれない。しかし、掃除が嫌い、苦手という人もいるはずだ。どうすればよいのだろうか。

「生きていくために、自分の髪の毛や体は洗いますよね。掃除もそれと一緒に。生きるために必要なんです。掃除用具をそろえなくてもタオル一本あればいいし、洗う・絞るが面倒なら使い捨てのウエットタオルを使えばいい。一緒に暮らしている人のために、汚れやすいところだけは拭く。『明日やろう』と先延ばしにすると精神的な重荷になってしまつて、結局やらない。サツと拭くことは、自分のためでもあるのですね」

新津さんには、プロならではの知恵と技術がある。フェイスタオルの使い方は明日からでも実践したいもの。そして、印象的だったのは「まずはじつと観察して、どこが汚れているか、どう拭けばいいかを考えること」という新津さんの姿勢だ。見て考えて行動するやさしさが人を幸せにし、モノを大事にする心につながり、ひいては自分の身を助けることにもなる。技に心が伴つてこそプロなのだ、改めて学んだ気がする。

(2018年2月1日取材)

(注3) 湿り拭き

濡れたタオルを乾いたタオルで巻いて軽く絞ると、濡れたタオルの水分が乾いたタオルに移ってちょうどいい湿り具合になる。

新津さん流の「拭く」工夫

1

オススメは「八つ折りタオル」

フェイスタオルを横に2回、縦に1回折る「八つ折りタオル」なら、表裏合わせて16面で拭くことができる



2

八つ折りタオルの絞り方



バケツを置くところに布を敷けば、水滴が垂れても大丈夫。片ひざをつくると体が安定するので、絞るときに力が入れやすい



手首でひねるのではなく腕全体で絞る
八つ折りタオルを半分に折る
バケツのなかで水に浸す

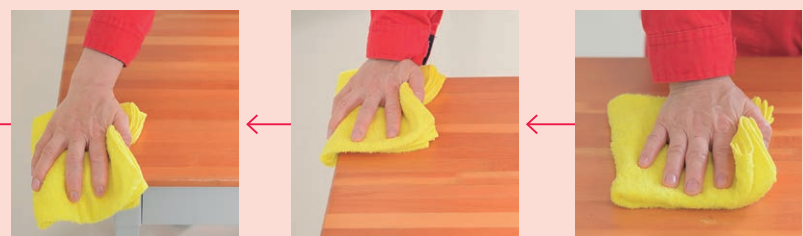


続いて手の甲の水も拭う。こうすれば水滴が周囲に飛び散らない
絞り終わったら開き、まず手のひらの水分を拭う

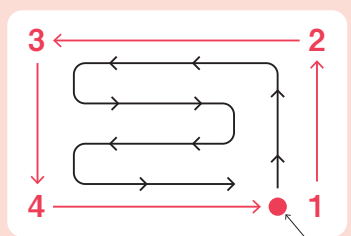
肩の力を意識するときつく絞れる。絞ったらいったん緩めてまた絞る。数回繰り返す

3

テーブル(机)の拭き方

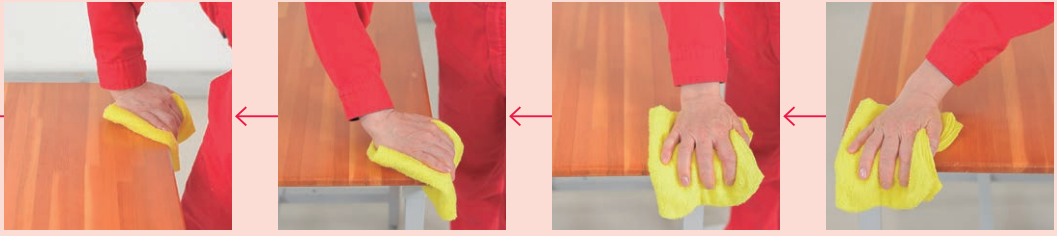


2 右上に到達。手の形は変えずそのまま横に移動
1 まずテーブルの枠に沿って上に拭いていく。側面も同時に拭けるように指を添える
八つ折りタオルは、タオルの端の重なりを親指と人差し指で挟むように持つとずれない



まずテーブルの四方を番号順にぐるりと拭き、タオルを裏返して奥から手前に拭く
タオルを裏返す

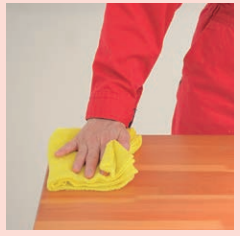
次は面を拭く。体に遠いところから左右交互に、横一線に拭いていく。そのとき、雑巾の幅の1/2が重なるように動かすと拭き残しがない



四方を拭き終えたときの手と腕の角度に注目。こうすれば一気に拭くことができる
4 左下に到達してもテーブルと手の向き関係は変えずこのまま横に移動
3 左上に到達。ここで右ひじを張るようにして左下に向かう

Point!

八つ折りタオルのきれいな面を出すときは、横ではなく「縦」に回転させること。タオルの端の重なり位置が変わらないのでスムーズに拭ける



新津さんが考案したマイクロファイバー製の「万能お掃除クロス」。水で拭くだけで汚れが落ち、軽くて扱いやすい。ポケット付きなのでスマートフォンなどを包んでカバンに入れておくと、すぐに使えて便利

